

毎日歌壇

米川千嘉子 選

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

茶を淹れる男を未だ見ず 吾の世はペットボトルを配るだけかも 坂戸市 納谷香代子
△評／世代差もありそうだが、少なくとも作者の同世代では、ペットボトルを配るのが限界というのに皮肉な実感が。

落下したモバイルバッテリーを手で労るように詠む 四日市市 早川 和博
△評／落下の衝撃で火を噴くことも。「手で労る」ことは意味がないのだが。

春よりも香ばしい色の首ならぶ十畳ひとの書道教室 千葉市 芍 葉
延々となつて一見聞き上手「好い人してゐるな」崩れ落ちさう 春日市 林田 久子

食べ物を熊にやるなど叫ぶ声「また人死ねば知床は死ぬ」 江別市 海老澤 基
追われてもそれでも今こそ生きている9月24日世界ゴリラの日 京都市 旅と自転車

いまもなほ宿場の名残泉川に西瓜冷やして梅花 城陽市 近藤 好廣
死のきわに君握りしめたる右腕のなままとして我を生かしむ 大阪市 森川 慶子

なぞなぞの「よ」から始まる怖いもの八歳は言う「よのなかじゃん」と 姫路市 おのえ双葉
草原の傾りに憩ふ母子馬櫓扇咲ける奥の群青 延岡市 河野 正

まっさらなノートをひらくわたくしに生まれて消える草原がある 津 市 川原田明子
△評／新品のノートをひらいて心が解放されたのだろう。草原のイメージが生まれる。すぐ消えたところにリアリティーがある。

口笛を吹いたらみんながこっちを見る みんなも勝手に吹けはいいのに 名古屋 森本 有
△評／みんなそれぞれ自由になればいいのにといいメッセージである。共感する。

今もなおこの木漏れ日の私の影に昭和終わらず百年となる 摂津市 石少山裏裏
合わせ鏡の途中にはあの日の鍵が置かれていたことがある 四万十市 佐竹 紫円

てんとう虫は上へ上へと登るからなんかついていね、飛べそうわし 東京 石井 しい
サンドイッチ用のパンって幸福感 愛することを受しながら 川崎市 新井 将

歳をとるほどに翼は広がって私は私を邪魔しなくなり 鶴岡市 島井 景
なるほどが口癖になりさびしい、を最後に友のLINEが絶える 横浜市 井上 整

みんなして天国みたいな顔をして浴びる噴水ぬるいじゃないか 東京 富尾 なつ
メニュー表にラーメンだけのラーメン屋そんな生き方できるか我は いわき市 高木 道浩

流れゆく雲のしつぽをやうやくに掴む どこなりと連れ去つてくれ 甲府市 村田 一広
△評／雲と会話する声が普通に聞こえて来る世界である。本当に連れて行ってもらえそう。

ピアノリストの腕ならぬらかにクロスして演奏という祈りの変異 東京 石川 真琴
△評／音楽家はみなそうかもしれないが、とりわけピアノリストは祈る姿に近い。

背泳ぎのさなかに浮力をうしなえば水の棺は開くでしょう 東京 珠海 ユラ
残照を背負う少女のフルートの8小節に在った永遠 盛岡市 立花 正行

石ころと目があったのでこの先もよろしくと言いつけ 横濱市 安西 大樹
ていねいに副旋律をなぞりゆく寄せあてている心臓ふたつ 高島市 くらたか湖春

梨がうまく剥けましたよおかあさん月をつつんだ雪のようです 大野城市 野分 のわ
時間とはクラゲのようにゆらゆらといずこともなく過ぎてゆくもの 加古川市 畑 啓之

遅すぎる愛はあれども月食の月赤らみて満ちゆく来世 小平市 十海こころ
ゆっくりと生きるものには海がよいジンバイザメもシーラカンスも 倉敷市 中路 修平

芋煮の夜まあるくなったクラス会居なくなりしにクラスをひとつ 北九州市 添田 修
△評／同窓会か。「芋煮」と「まあるくなつた」雰囲気がよく合う。その宴に亡き友も加わらせ盛り上がりつつあるのが伝わる。

何よりも猛暑の去りに感謝する昇給も無ききつい仕事も 仙台市 五十嵐 舞
△評／猛暑が去ったの感謝は当然として、下の句は本心ではあるまいと思うが。

飢えた子に顔を食べさせようとしたアンパンマンがガザで撃たれる 京都市 寺西 和史
落蟬の軽いからだを手にくく死へと近づく体温がある 春日井市 月夜の雨

包み紙捨てる前にも折りたたむ別れるときも丁寧な君 松戸市 小林 里純
帰宅してすぐに料理をする夫の背中が私の氷を溶かす 福岡市 中原 晶子

痛いところないかと問えば兄が言う皆が親切でハートが痛い 横浜市 豊田 迪子
まっすぐに「分かりません」と言えることA Iになき人の特権 東海市 中山あゆみ

真夜中に目覚め起きたす0歳児ミニアキッ トのごとく立ちある 長崎市 田中 正和
クレヨン握る小さき手のひらが世界に色を見つけたはじめる 札幌市 住吉和歌子

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます